

～洛西からの一読～

今回のテーマは「こどもって？」

子どもが子どもらしく生きていくためには何が必要？
子ども時代が楽しかったという人と、生きづらかったという人がいるようです。
無邪気に過ごせるわけもなく、それはそれで大変な時を過ごしてきたのかもしれない。お話の中の子どももいろいろです。

長くつ下のピッピ



長くつ下のピッピ

リンドグレン著 大塚 勇三 訳 岩波書店

ピッピはとてもたくましい女の子。力も強いけどそれ以上に心がつよい。母親を早くに亡くし、父親に育てられたピッピはその父親も海に投げ出され行方不明。なんとかかわいそうな子どもでしようと思っていると大違い。ピッピはなぜか前向きで、友だちも、学校も、なんでも自分の思いを貫いていくのです。騒動を起こし、問題視されることもあるけれど、ピッピの生き方がいつのまにか許されてしまいます。

ある日、火事現場に遭遇したピッピは、ピッピの機転で人命救助をおこないます。なんて賢い子でしょうとおとなたちもピッピを認め始めます。「ピッピといるとなぜかたのしいわ」とみんなが思ってしまいます。

このお話を読むと生きるエネルギーが補充されていくようです。

百まいのドレス



エリノア・エスティーズ文 ルイス・スロボドキン絵

石井桃子 訳 岩波書店

教室にいるかないかわからない存在のワンダは学校から遠く離れた地域に住んでいた。学校での友だちもなく、一人で学校に来て一人で帰っていく生活を過ごしていた。ペギーとマディーはある時ワンダに聞いてみた。「あなたはドレスを何まいお持ちですか？」「百まい」とワンダが答えたために彼女たちの執拗な質問攻めが始まりました。百まいもっているわけがない、嘘つきと彼女を責めていきます。

でも、ワンダは「百まいのドレス」を一着ずつ説明し始めます。なんだか嬉しそうにも見えます。しばらくして、ワンダが学校に来なくなってしまう、学校を変ったという手紙が届きます。ペギーとマディーはワンダをからかったことに罪悪感を感じていましたが、ワンダの描いたドレスを見て許してもらったのよねと納得しようとしません。子どもの頃は、名前が変わっているとかいつも同じ洋服ばかり着てるとか些細なことで、仲間外れにされたりすることがあります。何気なく言った言葉に傷つくこともあります。本当は友だちになろうと声をかけたかったのかもしれませんが。子どもの心は複雑です。